



解してみる時、この品の論相には今一つ注意すべきことがある。それは、この品に説かれる『信解空法』の『空』の説示が『空義』の面より語られていて、それは「地相品」「淨地品」に説かれた（所入の相）ものと同質のものであるといふことである。「地相品」「淨地品」の論説は、畢竟するに世俗諦成就の様相（空義）を菩薩の人格に於て語つていと考へられるが、「阿惟越致相品」の『空』の論説は正しくその成就する道を示すのである。故にこの品は「地相品」以下三品を受けたとみてよいと同時に、「地相品」等の所説は、「阿惟越致相品」によつて如實にその意義を全うするといはるべき面を持つていたのである。これが「阿惟越致相品」の『信解空法』の勸勵である。されば『信解空法』こそは前諸

死品の活にかかわる眼目であり、その成不成は「論」一部の中心問題である。この『信解空法』の實踐問題から易行品が生起してくるのである。

尙各品の論旨に就ては、大谷學報、第三十四卷、第二號、第三十五卷、第一號及び近く發行さる豫定の第四號の所載の拙論を参照されたい。

説一切有部阿毘達磨思想形成の過程について

櫻 部 建

一般的に言つて、阿毘達磨の發展に就いては概ね三つの段階が考えられている。第一は阿含自身の中に既に教法を整理組織し解説註釋を與えようとするい

ば阿毘達磨の傾向が見られることであり第二はその傾向が發展して遂に阿毘達磨藏を經藏から獨立せしめ、そこに教法の整理、解釋がいよいよ推し進められることであり、第三はその結果阿毘達磨は單に阿含の教法の整理、解釋ということだけに停まらず、その上に壯大な組織的教義體系が打立てられることである。

それを有部論書の發展の歴史の上でながめれば、最も初期の集異門、法蘊の二論はまさしく、右の第一段の直接の延長と見るべきものであり、識身・施設・界身・品類・發智・婆娑の諸論は、その後を承けて種々に有部の教學説を發展させた、右に云う第二の段階に相應するものである。また、心論・雜心・俱舍等の諸論はその有部の教學説を一貫した體系の下に組織化せんとしたもので、右の第三段階に相應するものと考えられる。

このような論書の階層的な發展について有部の教學説の上にももとより發展展開は見られる。しかし、特にこの部派の阿毘達磨論發展の經過の上できわ立つてい

かといえ、かなり特異な考え方立つていたが——その特異なものの考え方、獨特の教理組織の主要なものが、その基本的術語と共に、極めて初期において——すなわち上に述べた集異門論・法蘊論の階段において——既に成立しておると考えられることである。

たとえば、五位説と九十八隨眠説とは品類足論において、三世實有説は識身足論において、見道の現觀十六心（第十六は修道）説は甘露味論において、はじめ有部論書に登場し来るように見えるがそれら有部獨特の教學説はいずれも集異門・法蘊二論によつて既に豫想されている。その他、三無爲説・無表業論・七補特伽羅説や五種不還説の獨特な解釋・極七返有や家々や一間についての解釋・無想定と滅盡定とを二無心定として相對せしめる考え方・有身見等の五見説など、すべて他部派に共通しない有部獨特の考え方であると見られるが、いずれも最初期の論書中に見出されるばかりでなく、その中のいくつかは有部所誦の阿含の記述にまで遡ることができる。

もとより第二期以後の有部論書に重要

な教學説の展開がなかつたのではない。われわれはそのような例として諸法俱生の理論・極微説・世間論などを挙げることができる。しかし、全體から言えば、有部阿毘達磨論の歴史は、むしろ思想發展の跡を示すと言うよりも、その思想の組織化・體系化の跡を示していると言う方が適切であらうと思うのである。

戒體發得と他力信心

菅 原 大 石

戒は惡を制し善を行じて、衆生を利樂する處の佛道修行の基礎である。即ち、戒に依て定を起し定を修して慧を成ずるのではあるが、此の三學は畢竟一佛性の徳用であつて、戒體の究竟する處は不思議の佛智である。此の不思議の佛智を天台は性無作の假色と名づけ、日蓮は法華の題目と爲し、眞宗は彌陀の名號と云ふ。戒法授受の儀は、小乗では正しく戒法を授くる和尚と、羯磨作法を爲す羯磨師と戒徳威儀を説示する教授師と、受戒に錯謬無きを證する七證師との十師を請し、

大乘は唯一人の傳敎の師を請ひ、和上は釋迦、羯磨師は文殊、教授師は彌勒、尊證師は一切如來と爲し、一切菩薩を同學の等侶とする。此等の儀式に依て、行者が受戒した時に得る所の防非止惡の功能ある無表業を戒體と稱する。眞宗の信心は、衆生を招喚し名號を廻施する彌陀佛と、衆生を發遣し教法を演説する釋迦佛と、佛説を證識し衆生を護念する六方諸佛と、善知識の勸化とに依て發得する信心である。是を以て、余は彼の小乗の戒體發得の所に、已に眞宗の他力廻向の信心佛凡一體の果實を結ぶべき萌芽を見出すことが出来る。戒は小乗戒より權大乘戒に進み、更に圓頓戒に進み、又日蓮の法華律と成り、更に一轉して眞宗の他力信心に至るべき他力の意義を包藏して居るからである。小乗の戒體は、戒法を行者の心識に領受し、能受の心我が所受の戒法と冥合して無表業を成じ、初受の時は心識を能受とし戒法を所受とするけれども、受けたれば能所不二心法一體と成るのであるから、即ち戒法を攬て戒體と爲し佛道修行の基本として居る。天台の圓頓戒は、報身果佛の授くる所の戒法で